

戦後の日本語教育

— 韓国の1980年代の高校日本語教科書を手がかりに —

Japanese as a Foreign Language Education After the Second World War :
Based on 1980's Japanese Language Textbooks for High School Students in Korea

泉 文 明
IZUMI Fumiaki

キーワード

[日本語教育] Japanese Language Education [韓国] Korea
[日本語教科書] Textbooks of Japanese Language Education
[戦後] After the Second World War

I 序論（研究の必要性と目的）

序論は戦後の韓国の日本語教育の一端を知るための調査論文である。また、平成17年度文部科学省科学研究費基盤研究C「東アジアにおける1945年以降の日本語教育の自律と変容に関する調査研究」（代表：杏林大学本田弘之教授）に関わる報告の一部である。戦前・戦中を通じて、朝鮮半島において、日本は言語的にも支配してきたのは周知のことであるが、1974年2月4日、文教部（現「教育部」、日本の文部科学省に相当）令 第310号（概略は、高等学校教育課程で1975学年度よりドイツ語・フランス語などと同様に第2外国語として日本語を実施するというものである。）により、韓国の高等学校における日本語教育は再開された。

教科書は当初、単一の国定教科書であったが、1981年12月31日、文教部告示第442号で検定を通過した5種の教科書が改正され、1984年度から施行、使用されるにいたった。

周知のとおり、韓国では現在は、日本文化も開放され、日本の歌謡曲や漫画なども流布しているが、終戦当時は、言語をはじめ一切の日本的なものに対して、過剰なまでに警戒感をもっていたのは事実である。したがって、戦後韓国の日本語教育のターニングポイントに大きく関わったと考えられる〈1984年度現在の韓国高等学校日本語教科書〉をつぶさに検討してみると、今に至るまでの過程を知るための手がかりの一つになると考えた。具体的には、前述の5種の教科書の中の表現や語彙を分析してみたいと考える。

II 調査の資料と方法

資料としては1983年7月29日の、文教部最終検定で認可された「高等韓国日本語教科書」5

種類、各種ともに上・下セット、全10冊を対象とする。教科書名と出版社、出版日は次のとおりである。

『高等学校日本語 上・下』（教学社）1984.3.1

『高等学校日本語 上・下』（金星出版社）1984.3.1

『高等学校日本語 上・下』（時事英語社）1984.3.1

『高等学校日本語 上・下』（翰林出版社）1984.3.1

『高等学校日本語 上・下』（地学社）1984.3.1

この5種10冊を調査対象とした。ここに提示された語彙を固有名詞を中心に、〈日本的なるもの（以下〔J〕）〉〈韓国的なるもの（以下〔K〕）〉〈その他の国・地域を表したもの、あるいは全世界的・広範囲なもの（以下〔W〕）〉として、語学教科書に見られる、国・地域の文化紹介の実態に迫ろうと試みた。

その理由は、日本語教育の再開という事実は、日本文化を紹介するということの意味するものではなく、もちろん両者には関連はあるものの、当時の国民感情や世論、さまざまな条件のもとで編まれたものであろうことが予想できるからである。

固有名詞でなくとも、何がしかの固有的な・あるいは普遍的な意味合いをもつと考えられる語についても、対象とした。なお、語彙の分類基準については、国立国語研究所（現行政法人国立国語研究所）の『日本語教育のための基本語彙調査』（東京、秀英出版、1984）に基づいた。

なお、参考までに〈1984年度現在出版の高等韓国日本語教科書〉5社に提示された語のうち、表出頻度（延べ）100以上のものを次に提示しておく。

◎「教学社」：「ある」（256）「いる」（255）「わたし」（228）「いく」（204）「例」（200）「する」（176）「この」（156）「くる」（120）「いう」（119）「こと」（118）「なに」（114）「あなた」（113）「人」（103）

◎「金星出版社」：「ある」（360）「いる」（332）「する」（255）「なさる」（219）「こと」（207）「わたし」（195）「いう」（177）「なる」（168）「ことば」（166）「いく」（139）「例」（122）「くる」（120）「なに」（103）

◎「時事英語社」：「ある」（333）「いる」（262）「する」（155）「いく」（153）「こと」（142）「わたし」（128）「なる」（115）

◎「翰林出版社」：「ある」（360）「いる」（279）「わたし」（270）「する」（236）「いく」（215）「こと」（189）「あなた」（149）「なる」（139）「いう」（134）「いい/よい」（133）「くる」（112）「この」（111）「ひと」（105）「はい」（104）

◎「地学社」：「ある」（236）「いる」（213）「いく」（150）「この」（138）「わたし」（132）「なる」（131）「その」（120）「こと」（118）「する」（116）「いう」（114）「くる」（112）「なに」（104）

これらの結果は、国立国語研究所による語彙調査〔「国語教育のための基本語彙体系」「婦人雑誌の用語」「総合雑誌の用語」「現代雑誌90種の用語用字」〕など、一般的・普遍的なものとの概ね一致しており、特に語彙用指導書として編まれたものでないことを意味している。

Ⅲ 調査の結果

本章では、〈1984年度現在出版の高等韓国日本語教科書〉に記載されている語のうちから、文化情動的な語を抽出し、[K] [J] [W] とに大別し、その分布や内容を探ろうとするものである。

次に、そのリストを提示する。リストの見方は、(1) 見出し語を五十順で提示する。(2) 教科書会社の後の [] 内に [K] [J] [W] の別を記す。(3) 同一見出し語が複数の教科書会社にまたがって、登場する場合にはその全部を記載する。(4) 「いく/ゆく」など語形が異なるものの同一語と考えられる語については同語として提示した。また、[K] [J] [W] のうち、複数の領域にわたっている語については、提示順に記号の配列も合わせた。

リスト 〈1984年度現在出版の高等韓国日本語教科書に提示された、文化的な意味合いを表す語〉

アインシュタイン：[W]	インチョン（仁川）：[K]
アクタガワリユーノスケ （芥川龍之助）：[J]	インド（India）：[W]
あさくさえき（浅草駅）：[J]	インド人：[W]
アジア：[W]	インドネシア：[W]
アジアきょうぎたいかい：[W]	うえだ（上田〔人名〕）：[J]
アジアたいりく：[W]	うえだたかいち（上田高市）：[J]
アシアンゲーム：[W]	うえの（上野〔地名〕）：[J]
アチッキ（阿直岐）：[K]	うじがみさま（氏神様）：[J]
アフリカ（Africa）：[W]	うめだ（梅田〔人名〕）：[J]
アメリカ（America）：[W]	ウルチロ（乙支路）：[K]
アメリカ人：[W]	ウンジュ（銀球〔人名〕）：[K]
アメリカ製：[W]	エグチシンイチ（江口眞一）：[J]
アメリカたいりく：[W]	エジプト（Egypt）：[W]
アン（安）〔人名〕：[K]	えひめけん〔地名〕：[J]
イ/イー（李）：[K]	オーサカ（大阪〔地名〕）：[J]
イースンシン（李舜臣）：[K]	オオタ（太田〔人名〕）：[J]
イカルス：[W]	おおたいちろう（太田一郎〔人名〕）：[J]
イギリス：[W]	おおみそか：[J]
イギリス人：[W]	おおやま（大山〔人名〕）：[J]
いしかわたくぼく（石川啄木）：[J]	おかもと〔人名〕：[J]
イスラエル（Israel）：[W]	おくりび（送り火）：[J]
イドンギ（李東基）：[K]	おせち（お節）：[J]
イム（林）：[K]	おせちりょうり：[J]
イムジンわらん：[K J]	オンドル：[K]
イムヨンホ（林容浩）：[K]	ガウス〔人名〕：[W]
イムン駅（里門駅）：[K]	かなもじ（仮名文字）：[J]
	かねこ（金子〔人名〕）：[J]

金田幸一：[J]
 かんこくいち（韓国一）：[K]
 かんこくオリンピックいいんかい：[K]
 かんこくぎんこう：[K]
 かんこくご：[K]
 かんこくし：[K]
 かんこくしき：[K]
 かんこくじん：[K]
 かんこくてき：[K]
 かんこくぶんか：[K]
 カンサイ（関西）：[J]
 カンチョンえき（江村駅）：[K]
 カントー（関東）：[J]
 かにち（韓日）：[K J]
 かんはんとう（韓半島）：[K]
 カンファト（江華島）：[K]
 かんみんぞく（韓民族）：[K]
 かんわじてん（漢和辞典）：[W J]
 キス（基沫 [人名]）：[K]
 きたはらはくしゅう
 （北原白秋 [人名]）：[J]
 キテツ（基哲 [人名]）：[K]
 キム（金 [人名]）：[K]
 キムサファ（金思華 [人名]）：[K]
 キムソウン（金素雲 [人名]）：[K]
 キムチ：[K]
 キムチチゲ：[K]
 キムチャンホ（金昌浩 [人名]）：[K]
 キンポ（金浦 [地名]）：[K]
 キムポくうこう：[K]
 きむら（木村 [人名]）：[J]
 きゅうしゅう（九州）：[J]
 きゅうせん（休戦）：[K]
 きょうと（京都）：[J]
 キョンジュ（慶州）：[K]
 キョンジュゆき：[K]
 キョンスン（鏡城）：[K]
 キョンドクおう（景德王）：[K]
 キョンヒ [人名]：[K]
 キョンヘル（慶会楼）：[K]

キョンボクグン：[K]
 ギリシア：[W]
 ギリシア人：[W]
 ギリシア民族：[W]
 ギリシャ神話：[W]
 クァンジュ（光州）：[K]
 クァンファムン（光化門）：[K]
 クーベルタン：[W]
 ケチョンジョル：[K]
 ゲッチンゲンだいがく：[W]
 げんじものがたり（源氏物語）：[J]
 コーベ（神戸）：[J]
 コグリョ/こうくり：[K]
 こばやし（小林）：[J]
 こばやしいっさ（小林一茶）：[J]
 コリョ（高麗）：[K]
 コリョせいじ（高麗青磁）：[K]
 コンジュ（光州）：[K]
 さとう（佐藤 [人名]）：[J]
 さとうひでお（佐藤秀雄）：[J]
 さま/さん（様）：[J]
 サモスとう（サモス島）：[W]
 サリーベン [人名]：[W]
 シュークスピア：[W]
 ジェジュド/ゼジュド [地名]：[K]
 しこく（四国 [地名]）：[J]
 しちごさん（七五三）：[J]
 しちょう（市庁）：[K]
 しやくしょ（市役所）：[J]
 ジャズ (jazz)：[W]
 ジャパニーズ (Japanese)：[J]
 じょうようかんじ（常用漢字）：[J]
 しょくみんち（植民地）：[KJ]
 シン（申 [人名]）：[K]
 しんぐん（清軍）：[W]
 じんじゃ（神社）：[J]
 しんじょうよしあき：[J]
 シンチョン（新村）：[K]
 シンラ（新羅）：[K]
 スイス (suisse)：[W]

すずき [人名] : [J]
スミス [人名] : [J]
スンオク (順玉 [人名]) : [K]
ゼウス (zeus) : [W]
ゼウスしん : [W]
ゼウスしんでん : [W]
セージョンだいおう : [K]
セージョンぶんかかいかん : [K]
セマウルごう : [K]
セマウルせいしん : [K]
せんけもとまろ (千家元麿) : [J]
ソウル : [K]
ソウルうんどうじょう : [K]
ソウルえき : [K]
ソウルオリンピック : [K]
ソウルし : [K]
ソウルだいがく : [K]
ソウルタワー : [K]
ソラクサン (雪獄山) : [K]
ソン (孫 [人名]) : [K]
ソンキチョン : [K]
ソンス (成沫) : [K]
ソンピョン : [K]
ソンホ (成浩) : [K]
だいかんみんこく (大韓民国) : [K]
タイワン (台湾) : [W]
たかまつつか : [J]
たかむらこうたろう (高村光太郎) : [J]
たかやましのぶ (高山信夫) : [J]
たなか (田中 [人名]) : [J]
たなかみちお (田中道夫) : [J]
たなばた (七夕) : [J]
タノジョル (端午節) : [K]
たむら (田村) : [J]
たむらよういち (田村洋一) : [J]
たろう (太郎) : [J]
たんご (端午) : [J]
タンジョン (端宗) : [K]
チャキョンジョン (慈慶殿) : [K]
チャムシル : [K]

チャンジョンウォン : [K]
チャキョングン (慈慶宮) : [K]
チャンホ (昌浩) : [K]
ちゅうかりょうり (中華料理) : [W]
ちゅうごく (中国) : [W]
ちゅうごくご (中国語) : [W]
ちゅうごくじん (中国人) : [W]
ちゅうごくふう (中国風) : [W]
チュソク (秋夕) : [K]
チュニャンチョン (春香伝) : [K]
チュンチョンゆき (忠清行き) : [K]
ちとせあめ : [J]
チュンチョンナムド (忠清南道) : [K]
チュンチョンブクド (忠清北道) : [K]
チョソンおうちょう : [K]
チョソンじだい (朝鮮時代) : [K]
チョンロ (鐘路) : [K]
チリサン (智異山) : [K]
チルソク (七夕) : [K]
チルチル [人名] : [W]
チン (陳) [人名] : [K]
ていこくしゅぎ (帝国主義) : [J]
デクァンリョンク [地名] : [K]
テジョン (大田 [地名]) : [K]
テチョン (大川 [地名]) : [K]
テハンかいきょう (大韓海峡) : [K]
ドイツ : [W]
ドイツご : [W]
ドイツじん : [W]
トーカイドーセン (東海道線) : [J]
とうきょう (東京) : [J]
とうきょうオリンピック : [J]
トーキョーホテル : [J]
とうきょうゆき (東京行き) : [J]
とうだいじ (東大寺) : [J]
とうなんアジア (東南アジア) : [J]
とくがわばくふ (徳川幕府) : [J]
トクスグン (徳寿宮) : [K]
トルストイ [人名] : [W]
ナツメソウセキ [人名] : [J]

ナポレオン・ソロ：[W]
ナムサン（南山）：[K]
ナムサンこうえん：[K]
ナムサントワー：[K]
ナムサンホテル：[K]
ナムデムン（南大門）：[K]
ナムヘ（南海）：[K]
なんきょくたいりく（南極大陸）：[W]
ナンデムン（南大門）：[K]
にしだ（西田 [人名]）：[J]
にしドイツ：[W]
にっかん（日韓）：[J K]
にっかんじしょ（日韓辞書）：[J K]
にっかんじてん（日韓辞典）：[J K]
にほん/にっぽん（日本）：[J]
にほんかい（日本海）：[J]
にほんごかいわ（日本語会話）：[J]
にほんごやく（日本語訳）：[J]
にほんじん（日本人）：[J]
にほんちゃ（日本茶）：[J]
にほんふう（日本風）：[J]
にほんぶんがく（日本文学）：[J]
のだ（野田 [人名]）：[J]
ハギワラサクタロウ（萩原朔太郎）：[J]
パク/パク [人名]：[K]
パクテスシュ [人名]：[K]
パクヒスン [人名]：[K]
はなだようこ [人名]：[J]
ハムキョント（咸京 [地名]）：[K]
ハムキョンブクト [地名]：[K]
ハムフン（咸興 [地名]）：[K]
はらぐち（原口 [人名]）：[J]
はらだなおゆう [人名]：[J]
はんいるなむ [人名]：[K]
ハンガン（漢江）：[K]
ハングル：[K]
ひなにんぎょう：[J]
ひなまつり：[J]
ヒマラヤ：[W]
ひらがな（平仮名）：[J]

ひらかわたろう（平川太郎 [人名]）：[J]
ひらた（平田 [人名]）：[J]
ひろえ（広重 [人名]）：[J]
プガクサン（北岳山 [地名]）：[K]
プクハン山 [地名]：[K]
プサン（釜山 [地名]）：[K]
ふじさん（富士山 [地名]）：[J]
ふみお（文雄 [人名]）：[J]
ふみこ（文子 [人名]）：[J]
プヨ（扶余 [地名]）：[K]
ブラウン [人名]：[W]
ブラジル [地名]：[W]
フランス [地名]：[W]
フランスご：[W]
フランスじん：[W]
プルクッサ/ぶっこくじ（仏国寺）：[K]
フンクッサ（興国寺）：[K]
ベートーベン：[W]
ペウウンデ（白雲台 [地名]）：[K]
ペックジェ/ペクゼ/ペクチェ/くだら
（百濟 [地名]）：[K]
ペックジェかんのんぞう：[K]
ベルリン [地名]：[W]
ベルリンオリンピック：[W]
ベルリンたいかい：[W]
ヘレンケラー [人名]：[W]
ぼっちゃん（坊ちゃん）：[J]
ほうりゅうじ（法隆寺）：[J]
ほっかいどう（北海道 [地名]）：[J]
ポルトガルじん：[W]
ホンナン [人名]：[K]
マサン（馬山 [地名]）：[K]
まつおばしょう（松尾芭蕉 [人名]）：[J]
まつだ（松田 [人名]）：[J]
マレーシア [地名]：[W]
みちこ（道子 [人名]）：[J]
ミチル [人名]：[W]
みどり（緑 [名] [人名]）：[J]
みよし（三好 [人名]）：[J]
みよしたつじ（三好達治 [人名]）：[J]

ミヨンドン (明洞 [地名]) : [K]
 ミョンヒ [人名] : [K]
 ミン [人名] : [K]
 ミンキシユ [人名] : [K]
 ムグンファ : [K]
 むらた (村田 [人名]) : [J]
 むらやま (村山 [人名]) : [J]
 むろまちじだい (室町時代) : [J]
 ムン (文 [人名]) : [K]
 ムンイクチョン (文益漸 [人名]) : [K]
 メーテルリンク [人名] : [W]
 モーツァルト : [W]
 モントリオールオリンピック : [W]
 やぎぬまたけお
 (八木沼健夫 [人名]) : [J]
 やまかわ (山川 [人名]) : [J]
 やまぐち (山口 [人名]) : [J]
 やまぐちかずこ (山口和子 [人名]) : [J]
 やました (山下 [人名]) : [J]
 やまだ (山田 [人名]) : [J]
 やまと (大和) : [J]
 やまなか (山中 [人名]) : [J]
 やまむら (山村 [人名]) : [J]
 やまむらばちょう
 (山村慕鳥 [人名]) : [J]
 やまもと (山本 [人名]) : [J]

やまもとしずこ (山本静子 [人名]) : [J]
 ヤンチャンモ [人名] : [K]
 ようこ [人名] : [J]
 ヨーロッパ : [W]
 ヨーロッパふう : [W]
 よしお [人名] : [J]
 よしだ (吉田 [人名]) : [J]
 よしむら [人名] : [J]
 よさのぶそん (与謝蕪村 [人名]) : [J]
 ヨンサン [地名] : [K]
 ヨンスン [人名] : [K]
 らしょうもん (羅生門) : [J]
 ラテンゴ : [W]
 ラドクリフ [人名] : [W]
 り (李) : [K]
 リーミンホ [人名] : [K]
 りちょう (李朝) : [K]
 りちょうじだい (李朝時代) : [K]
 リミエ (李美愛 [人名]) : [K]
 ローマ (Rome) : [W]
 ローマジ (ローマ字) : [W]
 ロシアゴ : [W]
 ロンドンオリンピック : [W]
 ロンドンたいかい : [W]
 ワンイン (王仁 [人名]) : [K]

IV 分析

リストに挙げられた語は全部で340語である。そのうち、[J] は138語で全体に占める割合は40.6%、[K] は120語で全体に占める割合は35.2%、[W] は75語で全体に占める割合は22.1%、[JK] [WJ] [KJ] は合わせて7語で全体に占める割合は2.1%である。

[J] の語には、代表的な日本の地名・都市名が名を連ねている。また、よくありそうな人名を提示している他、実在の人物として「芥川龍之介」「夏目漱石」「石川啄木」「小林一茶」「松尾芭蕉」「北原白秋」らの名が見える。これらはいずれも文学界の人であるし、「源氏物語」「羅生門」のように文学作品が挙がっている。都市名でひらがなで提示されたものに「きょうと (京都)」「とうきょう (東京)」などが、カタカナで提示されたものに「オーサカ (大阪)」「コーベ (神戸)」「トーキョー (東京)」などがある。この差異は出版社によって都市名・地名の挙げ方の方針が異なる場合に生じたものである。

それに対して [K] の方はどうであろうか。代表的な地名・都市名とよくありそうな人名の提示ということについては [J] と同様であるが、人名については「世宗大王」「李舜臣」の名があり、文人と武人を代表する形で登場している。ちなみに「世宗大王」はハングルの産みの親であり、「李舜臣」は日本を撃退した韓国の英雄である。また「韓国オリンピック委員会」「ソウルオリンピック」といった文句が度々登場するが、東京オリンピックについて1988年にアジアで2度目を控えた喜びと盛上がり体を言っているかのようである。さらに、「休戦」という語には分断国家としての苦悩と緊張がうかがえるし、「帝国主義」という語からは日本語は学ぶが過去の経験は忘れまいという思いを表しているかのようである。

[J] と [K] に提示された語を比較してみると、[J] が文学会の事象が非常に多いのに対して、[K] の方は偏りが小さいように思われる。日本文化が大量に入り込むのを恐れて、文学会に限定して提示したためにこのような結果に至ったのか、あるいは教科書の作成チームが日本文学専攻の人材が中心であったことに起因しているのか分らない。今後、調査するつもりである。また「韓国文化」という語は提示されているが「日本文化」という語は提示されていない。このあたりにも、日本文化流入に対する警戒感と国民感情への配慮が感じられる。また、[J] の「市役所」(教学社) と [K] の「市庁」(金星出版社) のように、同じ [cityhall] を表すのにも、日本的に表現するのか韓国的に表現するのか、出版社によって差異が見受けられる。同様に [J] の「たんご(端午)」(金星・翰林・地学の各出版社) [K] の「タノジョル(端午節)」(金星出版社) のように、社の独自性による差異と、金星出版社のように両者を提示しているものもある。「チョソンおうちょう」「チョソンじだい」「セージョンだいおう」「セージョンぶんかいかん」などのように、韓国と日本の字音を混ぜて表記したものを提示している語も少なくない。その際に法則的なことは、韓国の固有的な部分を韓国字音にしていることである。

[W] に提示された語であるが、人名に関しては「アインシュタイン」「ベートーベン」「モーツァルト」「メーテルリンク」のように世界的に知名度が高く、領域的には各界に分散している傾向があるといえよう。また、さまざまな国を提示して、実践的運用を図っていることも伺える。さらに、特筆すべきこととしては「ちゅうかりょうり(中華料理)」「ちゅうごくご(中国語)」のように、漢字漢語圏である中国に関する呼称については、その他の地域と区別して、日本の表記規準に準じた表記で提示している。

その他の項目である、[JK] には「日韓」「日韓辞書」「日韓辞典」、[KJ] には「イムジンわらん」「韓日」「植民地」、[WJ] には「漢和辞典」がある。

「日韓」のように先に日本が表記されているものについては [JK] を、その逆の場合には [KJ] とした。「イムジンわらん」と「植民地」については攻められた立場と攻めた立場で逆方向ではあるが、双方ともに関係しているのであるが、韓国で編集・出版されたものであるので、その立場を優先させて [KJ] とした。この2語については、[J] のところで述べた「帝国主義」と同一のニュアンスが感じられる。

V 課題

当時の韓国の情勢は日本語教育の必要度の高まりと、未だ癒えることのない反日感情の狭間にあったといえよう。

言語の背景には文化があり、文化は生活と密接に繋がっている。いうまでもなく、言語と文化は不可分の関係にある。

この度の調査によって、この相矛盾することがらを、最小の摩擦・抵抗にとどめながら、日本語教育の再開に踏み切るに至った関係者の苦労がある程度理解できたように思われる。

同様の調査を、戦中と現今の資料を用いて行い、通時的な流れとなるような研究に発展させたいと思う。また、戦時中に韓国と同様に日本語教育を行っていた他の地域が、戦後日本語教育の再開に当たって、どのような配慮と工夫してきたのか、地域を越えて、やはり同種の調査を行いたいと考える。

[調査資料]

- 『高等学校日本語 上・下』（教学社）1984.3.1
- 『高等学校日本語 上・下』（金星出版社）1984.3.1
- 『高等学校日本語 上・下』（時事英語社）1984.3.1
- 『高等学校日本語 上・下』（翰林出版社）1984.3.1
- 『高等学校日本語 上・下』（地学社）1984.3.1

[参考文献・参考資料]

- 国立国語研究所『日本語教育のための基本語彙調査』（東京、秀英出版、1984）
- 国立国語研究所「国語教育のための基本語彙体系」
- 国立国語研究所「婦人雑誌の用語」
- 国立国語研究所「総合雑誌の用語」
- 国立国語研究所「現代雑誌90種の用語用字」
- 泉 文明（1994）「韓国人の日本観 ―一般人と日本語学習者―」『龍谷大学国際センター研究年報』3 pp.1-13
- 泉 文明（1998）「韓国における日本語教育の現状と展望 ―高等学校と放送通信大学校を中心に―」『龍谷大学国際センター研究年報』7 pp.19-28